

「CNS-FACEⅡを用いた家族看護 ～患者家族のニーズに沿った看護の提供を目指して～」  
HCU ○榎下町さおり 古田真珠 高口実佳 草場 昂 小柳実香

【目的】

救急看護では、危機的状況に陥りやすい家族もケアの対象とすべきであることは周知されているが、当部署では患者の治療が最優先となり家族への対応は後回しになってしまうことが多い現状があった。そのため、患者家族のニーズに沿った看護は十分に提供できていない状況にあると考えた。

家族看護に関する研究として、山勢らが CNS-FACE を作成し、家族のニーズを踏まえた重症救急患者への看護が実施されるようになったとされている。開発から 10 年以上が経過したが、国民の救急医療に対する認識や重症患者の末期医療に関する社会的問題などがクローズアップされ、クリティカルケアにおける家族ニーズの変化が起きている。このような社会背景を受け、今の臨床に即した家族ニーズなどを適切に測定出来るよう 2012～2016 年の期間 CNS-FACE の改定が行われた。完成版である CNS-FACEⅡは 2016 年より運用が開始になっている。CNS-FACE に関する研究は多岐にわたり行われているが CNS-FACEⅡの有用性についての研究は殆ど行われていないのが現状である。本研究では、CNS-FACEⅡを用いた家族のニーズをふまえた看護の実践を行う事で、看護師の家族看護への意識向上を図るとともに、当部署内の環境における CNS-FACEⅡの有用性の評価を行う。

【方法】

1. 研究対象：朝倉医師会病院の急性期病棟に緊急で入院となった患者家族
2. データ収集期間：2019 年 9 月～2020 年 6 月
3. データ収集方法、手順
  - 1) HCU スタッフへ家族看護についてのアンケートを実施。CNS-FACEⅡについて必要性和使用方法について勉強会を行う。事例を用いて CNS-FACEⅡの評定項目を評定し用紙に記載して練習を行う。
  - 2) CNS-FACEⅡ行動評定チェック用紙を用いて対象家族の行動を観察、評定し用紙に記載する。
  - 3) 患者家族のニーズ、コーピングをふまえて、入院翌日に必要な家族看護についてカンファレンスを行う。内容はカンファレンス用紙に記載する。CNS-FACEⅡ測定紙とカンファレンス内容については専用のファイルに保管する。
  - 4) 家族のニーズ、コーピングに沿った家族看護を実践し看護記録に記載する。
  - 5) CNS-FACEⅡの測定は HCU 退室時まで行う。退室後、測定紙は看護研究担当スタッフが専用ファイルに保管する。
  - 6) 測定したデータは看護研究担当スタッフが CNS-FACEⅡ専用サイトに入力し集計する。
  - 7) 後日、HCU スタッフに対し家族看護についてアンケートを実施する。

【結果】

- 1) データ件数：総数 259 件 面会 1 日目：158 件、面会 2 日目：68 件、面会 3 日目：33 件
- 2) ニーズの平均値の推移：入院初日は「保証」「接近」「情報」のニーズの順に高値となっている。コーピングの平均値の推移：「問題志向的」、「情動的」の順であった。
- 3) 相関係数での分析：CNS-FACEⅡの測定結果を、山勢らが行った先行研究での測定結果と、当院での測定結果の平均値を相関係数で比較した。ピアソンの積率相関係数  $r$  にて「0.864」であった。値の絶対値が 1 に近いほど相関が強いことを表すため、先行研究結果と当院での測定結果の相関係数が高いことが確認された。

#### 4) アンケート結果

・2019年8月に1回目、2021年12月に2回目を実施。

1回目 14人、看護師総経験年数平均10年、HCU経験年数2年

2回目 13人、看護師総経験年数平均12年、HCU経験年数2.6年

<アンケート内容の抜粋>

・家族同士で相談したり、支え合っているか確認している

「1回目 はい71%、いいえ9% 2回目 はい92% いいえ8%」

・病状説明時は家族の反応を確認しながら説明している

「1回目 はい93%、いいえ7% 2回目 はい100%」

・CNS - FACE を使用するようになり家族看護を意識するようになったか

「はい77% いいえ23%」

・CNS - FACE を継続したほうがいいか「はい92% いいえ8%」

<CNS-FACE II使用前>

・家族にどのように声掛けしてよいか分からない時がある

・家族が落ち込んでいるときなど声掛けしにくい

<CNS-FACE II使用后>

・振り返った事例をみて家族が一息つけるような環境や周りのサポートへの介入、それを実施した記録での情報収集が大切だと感じた

・スタッフで家族について話すことも増えた

・予想が立つので介入しやすくなった

・どんな介入必要か目に見えて分かるのでよかった

・今はどのニーズが高いかなど考えて、介入するようになった

#### 【考察】

山勢は「家族アセスメントにおいて家族の抱くニーズに焦点を当てると、提供すべき看護の方向性をつかむことが出来る<sup>1)</sup>」と述べている。CNS-FACE IIを用いて家族のニーズを測定値として得ることは、家族のニーズを客観的に把握でき、看護介入の方向性を明らかにして検討できる点で有効といえる。統計を用いて分析を行い、先行研究結果と当院での CNS-FACE II測定結果の相関係数が高いことが確認された。

HCU スタッフを対象にしたアンケートでは、CNS-FACE II使用前は「家族にどのように声掛けしたらよいか分からない」という意見が聞かれたが、使用後は CNS-FACE IIをツールとして用いたことでニーズやコーピングに関する情報を得ることができていた。結果、家族のニーズを意識して関わりをもつことが出来たという意識の変化につながったと考える。また、CNS-FACE IIの有用性をスタッフの9割が支持していることから、当部署で CNS-FACE IIを家族アセスメントの標準的なツールとして用いることは有用だと考える。

感染症により面会制限がある中で、家族が患者にもつニーズは高まると考えられる。刻々と状態が変化する患者、非日常的な状態に晒される家族、煩雑で多忙な勤務条件下でもケアをする看護師、様々な背景があるクリティカルケアでも、CNS-FACE IIを用いることで家族のニーズに沿った援助が行えると考える。今後は緊急入院となった患者家族のうち、悲観的な発言や態度、流涙などの様子が認められた家族に使用対象者を定め、必要時に CNS-FACE IIを測定し、看護計画を立案して看護介入を行っていく。CNS-FACE IIの測定は家族の主観的な評価ではなく、第三者による客観的な評価という測定手法自体がツールの限界であるため、状況に応じてはインタビュー等によって家族自身の気持ちを引き出して主観的データを収集し評価する必要がある。